

資料編

青森県における生物多様性の現状と課題

1. 生物多様性を育む自然環境

(1) 概要

本県は、本州の最北端に位置し、東は太平洋、西は日本海、北は津軽海峡に面し、津軽・下北両半島に囲まれた陸奥湾を有しています。

また、奥羽山脈の北端に位置する八甲田山系が中央に広がり、それを境に、気候が日本海型と太平洋型に大別されるなど、地形、地質、気候が地域によって大きく異なります。そのことが、本県の豊かな生物多様性を育んでいます。

これら、本県の豊かな自然環境は、世界自然遺産白神山地、ラムサール条約湿地仏沼、十和田八幡平国立公園、三陸復興国立公園、下北半島国立公園、津軽国立公園など、我が国を代表する自然として指定されているほか、八戸市・階上町を含む三陸地域が三陸ジオパークとして日本ジオパーク委員会から認定されています。

なお、県内には、三内丸山遺跡をはじめ縄文遺跡が広く存在しています。これらの遺跡では、木の実や野生動物、海産物、編みかご、漆器等の遺物が多数出土しており、ひとつの資源に集中することなく本県の豊かな生物多様性を活かして、千年以上の長期間にわたり安定的に豊かな暮らしをしていたことがわかっています。

① 位置

本県は本州の最北端に位置し、東側は太平洋に、西側は日本海に面しているとともに、中央に陸奥湾をかかえています。県の北側は津軽海峡をはさんで北海道と、県の南側は階上岳、名久井岳、四角岳を境に岩手県と、十和田湖、白神山地を境に秋田県と隣接しています。

② 地形・地質

本県の地形は、山地、火山地、丘陵地、台地、低地および被覆砂丘に大別されており、奥羽山脈の北端部にあたる十和田・八甲田から夏泊半島、下北半島西部に至る南北に連なる山地を境にして、東部（県南）と西部（津軽）に二分されます。

東部は台地・丘陵地が広く分布し、低地には小川原湖などの湖沼群があります。一方、西部は岩木川によって形成された沖積平野と山地が主体を占めています。また、岩木山、八甲田山、恐山などの活火山があり、火山地としても大きな面積を占めます。

基盤を構成するのは古生代・中生代に形成された地層（先第三系）で、その上位に新第三系、第四系の更新統と完新統が分布しています。先第三系は粘板岩や石灰岩の他にチャートおよび変成岩等から構成されており、その分布は小範囲に点在している程度です。

新第三系は中新統～鮮新統の凝灰岩、頁岩、砂岩、火山岩等から構成されています。これらの地層は山地や丘陵地を構成し、津軽山地や白神山地、夏泊～下北半島西部にかけての山地に主に分布しています。

更新統は礫、砂、粘土、シルトと火山灰等からなり、段丘堆積物や太平洋側の平坦な台地を構成しています。完新統は礫、砂、粘土からなり、河川流域や海岸域に発達し平野を構成しています。火山噴出物は、火山灰や溶岩などからなっており、火山周辺に広く分布しています。

深成岩類は、花崗岩類を中心に秋田県境の白神山地および岩手県境の階上岳付近に比較的大きな岩体が分布していますが、他は小範囲に点在しています。

③ 気象と気候

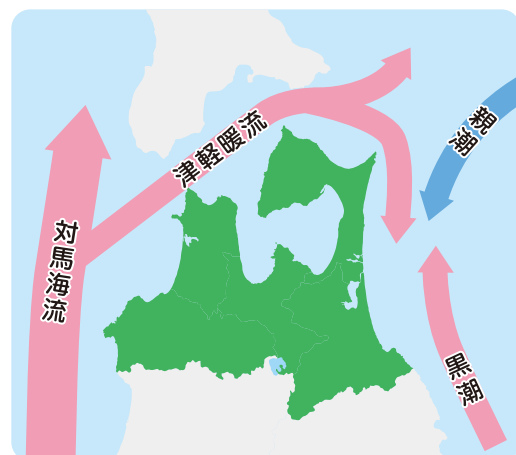
青森県は、三方が海に面し、陸奥湾もあることから長い複雑な海岸線となっており、気温変動の少ない海洋性の気候を呈する地域が多くなっています。また、本県の沿岸は、太平洋側では、北海道沖から南下する親潮寒流と津軽海峡を通過し太平洋を南下する津軽暖流、岩手県沖から北上する黒潮暖水塊、日本海側では、北上する対馬暖流といった海流があるため、気象や気候に大きく影響を与えています。

また、地形的にも奥羽山脈の北端部の十和田・八甲田山系によって二分されることで、日本海側の冬期間の北西風による積雪、太平洋側の梅雨期のヤマセ(偏東風)が代表的気象となっています。

県内全域が豪雪地帯に指定されており、そのうち一部地域は特別豪雪地帯に指定されています。また、青森市は都道府県庁所在地都市では唯一、市域すべてが特別豪雪地帯に指定されています。八甲田山系を境に西側及び北側は日本海側気候で、それ以外の地域は太平洋側気候となっています。ケッペンの気候区分でいうと、下北半島など太平洋側の一部は夏も冷涼のため、定義上では西岸海洋性気候とされることもあります。また、山岳地帯や碓ヶ関など南部の内陸部は亜寒帯(冷帯)湿潤気候です。南部ほど内陸性気候のため、寒さが厳しく、北部は海洋性気候のため寒さはそれほど厳しくありません。特に、日本海側沿岸部は緯度の割には温暖ですが冬季の日照時間は非常に少なくなっています。

④ 海洋

本県は、日本海、津軽海峡および太平洋と三面を海に囲まれ、中央には大型の内湾である陸奥湾が広がっています。海岸線は約 800 km あり、青森と箱根の間の距離とほぼ同じです。



青森県のまわりでは、日本海を対馬暖流が北上しています。その一部は津軽海峡に入って津軽暖流となり太平洋に達します。太平洋の沖合では、この津軽暖流と北からの親潮（寒流）、南からの黒潮暖水塊（暖流）がぶつかり合っています。暖流と寒流がまじり合った海には魚の餌となるプランクトンがたくさん発生し、多くの魚が集まり豊かな漁場がつくられます。

暖流に乗って北上してくる魚には、クロマグロ、ブリ、マダイ、スルメイカ、マサバ、マイワシなどがあり、寒流に乗って南下してくる魚にはサケ、マダラ、ホッケ、アブラツノザメなどがあります。また、周囲を陸で囲まれ、大きな時化が少ない陸奥湾では、ホタテガイの養殖が盛んで全国有数の生産地となっています。

⑤ 湖沼・河川

本県には、十和田火山のカルデラ湖である十和田湖、下北火山のカルデラ湖の宇曽利山湖、汽水湖の小川原湖湖沼群や十三湖、芦野池沼群、十二湖の池沼群のほか、多くのダム湖やため池も各地に分布しており、それぞれの環境に適応した多様な生物の生息・生育場所となっています。

また、日本海へと流れる岩木川、赤石川、追良瀬川、太平洋へ流れ出る、馬淵川、新井田川、五戸川、奥入瀬川、高瀬川、津軽海峡へ流れ出る大畑川、陸奥湾へと流れ出る川内川など、多くの河川が、上流域の森林地帯から、流域の農地を潤し、海へと水とミネラルを運ぶとともに、様々な生き物たちの生息・生育場所を提供しています。

⑥ 植物

青森県は、世界の湿潤な冷温帯を代表する森林である夏緑広葉樹林に覆われています。日本の多くの冷温帯の地域がそうであるように、森林を構成する代表的な樹木はブナとなっています。

日本のブナ林は、大きく日本海側のタイプと太平洋側のタイプに分けられます。このうち太平洋側のタイプは、北上山地の中部以南に分布することから、青森県のブナ林はすべて、日本海側のタイプといえます。このタイプのブナ林は、高木層に占めるブナの割合が高く、低木層にチシマザサ（ネマガリタケ）を伴い、林床にはヒメアオキ・ヒメモチ・ツルシキミなど、匍匐性の常緑低木が生育することを特徴とします。

ブナ林は、かつて東北日本の自然を形づくる森林でした。しかし開発によって、自然林の面積は激減しました。青森県には、ブナの自然林がかなり残存しており、特に白神山地は、国内最大のブナの自然林をもつとともに、東アジア最大級のブナ林生態系が評価され、1993年に世界自然遺産に登録されました。

暖温帯と冷温帯の地域には、広葉樹と並んで、あるいは広葉樹と混じって、広く針葉樹が生育しています。針葉樹は広葉樹と同様、熱帯から寒帯に至るまで広く分布し、北半球の亜寒帯では、“タイガ”とよばれる広大な森林を形成しています。国内において経済的に重要なのは、暖温帯から冷温帯にかけて分布

するスギやヒノキ、いろいろなマツ類など“温帯針葉樹”です。青森県のヒノキアスナロ（ヒバ）もこの代表です。

ヒノキアスナロは、栃木県（日本海側は佐渡島）から、北海道の渡島半島までの地域に分布しています。アスナロとともに、建材・家具・什器などに用いられる古くから重要な樹種です。青森県では、特に津軽半島と下北半島に集中的に分布しています。秋田県境の大鰐山地付近にも多少まとまって分布しています。日本のほかの温帯針葉樹とともに青森県のヒノキアスナロ林も、藩政時代から経済林として経営されていたので、人工林としての性格を強くもっています。

八甲田山の海拔約 900m から 1,400m にかけて、アオモリトドマツ（オオシラビソ）林が広く分布しています。この森林は、気候的には亜寒帯に相当します。アオモリトドマツは、南アルプスまで分布する日本固有の針葉樹で、八甲田山が分布の北限です。

八甲田山や岩木山の海拔約 1,400m 以上、白神山地の山頂部にはハイマツ群落が見られます。ハイマツ群落の分布域は、気候的には寒帯南部に相当します。

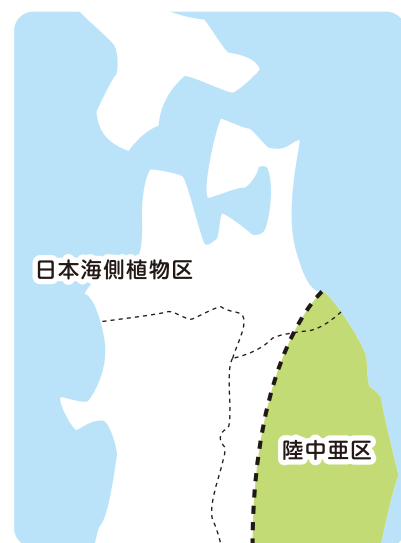
日本では慣用的にハイマツ群落を高山帯の代表的な植生としていますが、孤立した山頂などで、より高い高度の植物や植生が降下して現れる“山頂現象”によっても出現することがあります。青森県のハイマツ群落はこの“山頂現象”によるものと考えられます。

白神山地・八甲田山・岩木山などの山頂部や稜線部には、東北地方日本海側山地に広くみられる、ミヤマナラなどの低木を主体とした、夏緑性の低木群落が見られます。

景勝地として名高い奥入瀬渓谷は、溪流の両岸に鬱そうとした溪畔林が成立しており、その特異な景観が保たれています。

三陸復興国立公園に指定された八戸市の蕪島から南側の海岸と階上岳は、日本の植物地理区分上は日本海側植物区に入りますが、気候・地史的関係から北上高地を中心とする地域を陸中亜区とすれば、その北端部に相当し、太平洋側海岸部を北上する種類、北上山地との共通種、海流により南下する北方種などが交錯する地域です。

また、周囲を海に囲まれている本県は、海の中には、国内最大規模のアマモ場が広がるとともに、海岸沿いに湖沼群を伴いながら低湿地や砂丘・砂浜が存在しており、種差海岸の海岸植生や、小川原湖湖沼群や岩木川河口域のヨシ群落、ベンセ湿原に代表される屏風山地域の湿原植生、小川原湖で近年再確認されたマリモなどの他、水田やため池、畑や牧草地、里山の広葉樹林、



スギやアカマツの人工林など、人が自然に働きかけて作り上げた環境にも、それぞれ特徴的な植物群落が見られます。

本県に自生する在来種の種数は、細井幸兵衛（1994）の目録では、1694 種とされています。

⑦ 動物

青森県は、白神山地や八甲田山に代表される原生状態に近い豊かなブナ林が残存しており、ツキノワグマやニホンカモシカ、イヌワシやクマタカといった大型のほ乳類や猛禽類をはじめとした多種多様な動物たちが生息しているとともに、太平洋、日本海、津軽海峡に囲まれ、中央に陸奥湾を抱え、その海岸線は変化に富んでおり、様々な海洋生物や海鳥などの生息場所にもなっています。

本県の大きな特徴として、北海道と本州の間に津軽海峡があり、そのことが日本列島の動物分布に深くかかわっていますが、特に注目されるのは中・大型ほ乳類の分布の境界線となっていることです。

現在、日本列島にすむほ乳類の先祖は、10 万年以上の昔、日本列島がアジア大陸と陸地続きであったころに移動して来たとされています。南北両方面から入って来ましたが、時期的には南の方が早く、そのころには津軽海峡があったので、ほとんどの種の北上は本州北端でストップしました。

その後、氷期に入り、今度は日本列島の北の方がアジア大陸と陸地続きになり、北方からほ乳類が南下しました。早く来たものは本州の中部あたりまで移動しましたが、最終氷期が終わって（およそ1万年以上の昔）現在のような気候になり、津軽海峡ができ、本州まで入っていたほとんどの種は絶滅し、北海道にいたものは残りました。

このような経緯によって、津軽海峡を境にして、棲んでいるほ乳類の種が違ふ、ということになりました。津軽海峡には生物分布の境界線が引かれていますが、その名称は、そのような違いを発見した人の名をつけてブラキストン線と呼んでいます。

南方から来た種のなかで特に注目されるのはニホンザルです。世界にはサル類は 200 種ほどが生息していますが、それらの分布域は北緯 40° 以南です。しかし、ニホンザルは九州（屋久島）から本州北端まで分布し、その北限は下北郡大間町北端です。

鳥類については、かつてはほ乳類の場合と同じように津軽海峡が分布の境界線となる、という見解がありましたが、本州と北海道で共通して生息確認されている種も多く、日本列島の鳥相からみれば上記のほ乳類の場合のような顕著な境界線とはなっていません。

また、太平洋側に下北半島、日本海側に津軽半島が北に延びており、ガン・カモ類、シギ・チドリ類、ワシ・タカ類など渡り鳥にとってはとても重要なコースとなっているとともに、津軽半島にある十三湖、岩木川下流部、屏風山地域

の湖沼群や湿原、点在するため池と周辺の水田、下北半島基部にある六ヶ所村湖沼群、小川原湖やその周辺の湿原や水田、太平洋沿岸の海浜、河口干潟などは、ガンやカモ、ハクチョウなどの大型の渡り鳥やシギやチドリなどが休息したり、採餌する場所となっており、本県では、日本列島で観察記録されている全種数633種の約60%にあたる377種が観察記録されています。

両生類の場合は、津軽海峡をはさんで、顕著に異なり、青森県には15種すんでいますが、そのうち北海道にもすむのはただ1種アマガエルだけです。

昆虫類に関しては、たとえばチョウ類の場合は気候温暖な時代に南方から日本列島へ入って来て北上したものが、津軽海峡より北へは移れなかった種があり、それはアオバセセリなど17種で、現在、日本に産するチョウ類の総種数約200種に対して8%ほどです。

またゲンジボタルは九州から本州北端まで分布しますが、従来より分布北限地として知られている上北郡横浜町では、町民による保護活動が展開されていて、「横浜町のゲンジボタルおよびその生息地」として県天然記念物に指定されています。

以上のように、本州と北海道を隔てる津軽海峡が動物分布にとって境界線の役割を果たすとともに、本県における動物分布を特徴づける大きな要因となっています。

その他にも、水田、ため池、果樹園、牧草地、人工林などには、人が働きかけて作り上げた自然環境に適応した様々な動物たちが生息しています。

(2) 絶滅のおそれのある野生生物

経済活動の進展に伴い、自然河川や湿原・湖沼等の減少など生息水域の環境悪化、草地の減少や森林伐採、山野草等の乱獲などが進み、絶滅の危機に瀕している動植物の種数が増加しています。

また、以前は普通に見られていた、エビネやサクラソウなどの草花やイトヨやメダカなどの淡水魚類、ニホンザリガニやサワガニなどが急速にその数を減らしています。

	EX	A	B	C	D	LP	合計
植物合計	7	128	136	100	77	1	449
維管束植物	7	124	113	51	15	0	310
維管束植物以外	0	4	23	49	62	1	139
動物合計	9	54	80	157	152	15	467
脊椎動物	6	28	51	57	13	9	164
無脊椎動物	3	26	29	100	139	6	303
合計	16	182	216	257	229	16	916

EX(絶滅野生動植物種)、A(最重要希少野生動植物種)、B(重要希少野生動植物種)、C(希少野生動植物種)、D(要調査希少野生動植物種)、LP(地域限定希少野生動植物種)

※青森県レッドデータブック掲載種は下記URLで確認できます。

<http://www.pref.aomori.lg.jp/nature/nature/reddatabook.html>

① 植物

植物では、フサタヌキモ、ヤナギタウコギ、ハナヒョウタンボク、トウゴコウヘラオモダカ、カンエンガヤツリ、タチガヤツリ、ヒシモドキの7種が、県内ではすでに絶滅したとされています。(ヒシモドキについては、近年、生育地が確認されました。)

また、オキナグサ、サクラソウ、ヒメユリ、サルメンエビネ、ヒメホテイラン、アツモリソウ、マリモなど128種が青森県レッドデータブックのAランク(近い将来県内で絶滅が危惧される希少野生動植物種)にリストアップされています。

絶滅や減少の主な原因としては、生活排水の流入や農業の近代化等による生育環境の悪化、農地、宅地、工業用地などの開発や、人工林化、草地の減少など、土地利用の変化に伴う生育地域の消滅や減少、盗掘や乱獲による個体数減少が挙げられます。

② 脊椎動物

脊椎動物では、ほ乳類のニホンオオカミ、ニホンカワウソ、ニホンアシカ、ニホンイノシシ、ホンシュウジカと、淡水魚類のイトウの5種が、県内では絶滅したとされています。(ホンシュウジカについては、近年、隣県からの再侵入が確認されています。)

また、ほ乳類のクロホオヒゲコウモリ、ホンドノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、コヤマコウモリ、鳥類のオオヨシゴイ、クマタカ、イヌワシ、ウズラ、コノハズク、クマゲラ、オオセッカなど、は虫類のタカチホヘビ、淡水魚類のシナイモツゴ、ヤリタナゴ、タナゴ、ギバチ、ハナカジカなど28種がAランクにリストアップされています。

絶滅や減少の主な原因としては、乱獲による個体数の減少、自然林の減少や湿原等の開発、草地の減少、生活排水の流入による水質の悪化など生息地域の消滅や減少、外来種による捕食などが挙げられます。

③ 無脊椎動物

無脊椎動物では、昆虫類のトラフトンボ、ムツアカネ、オオルリシジミ、の3種が絶滅したとされています。

また、昆虫類では、カラカネイトンボ等のトンボ類、チャマダラセセリ等のチョウ類、タガメ、昆虫以外ではキタホウネンエビなど26種がAランクにリストアップされています。

絶滅や減少の主な原因としては、自然林や草地、湿原などの開発による生息地域の消滅や減少、生活排水の流入や農業の近代化に伴う、生息環境の悪化、乱獲などが挙げられます。

(3) 生物多様性がもたらしてきた恵み

① 基盤サービス

生態系がもたらす恵みの土台を築くもので、そもそも人間社会を含む生物種や生息域が存在するための酸素の供給、栄養塩の循環、土壌の形成など、命のインフラを形成している機能です。

白神山地や八甲田山などに代表される広大な森林を形成する植物は光合成により二酸化炭素と水から炭水化物を生成し自らの体と栄養分を作り出します。その過程で酸素を放出し、私たちの呼吸に利用されます。また、落ち葉や枯死した植物体は土壌微生物等に分解されて土壌を形成し、動植物の生息・生育の土台になります。このように生物多様性の恵みを支える基盤となるサービスで、陸上の植生や土壌微生物、海洋生物などが大きな役割を果たしています。炭素や栄養塩類の物質循環には、白神山地や八甲田山などに代表される森林、岩木川、馬淵川、奥入瀬川、大畑川、川内川などの河川、太平洋、日本海、陸奥湾などの海を大きく循環している水が支えています。

② 供給サービス

水、食料、材料、薬品など生活に欠かせない衣食住の基盤となるのが供給サービスです。

ア. 農産物

米、リンゴ、ナガイモ、ニンニク、ゴボウなど、本県を代表する農作物のほか、食用菊阿房宮、糠塚キュウリ、一町田セリ、清水森ナンバ、妙丹柿などの地域伝統作物、牛、馬、豚、鶏、鶏卵、牛乳、はちみつなどの畜産物なども、生物多様性がもたらす恵みです。

また、農耕や運搬、交通手段としての牛馬などへの動物利用もまた多様な特性を持った動物たちがいたからこそ利用することができたものです。

イ. 林産物

青森ヒバ、南部アカマツといった地域特有の木材や、スギ、ブナ、クリなどの木材は、住宅建材や家具建具材はもちろんのこと、樽や桶など生活の道具、

土木資材などに幅広く利用されています。

また、ネマガリダケ、シドケ、ゼンマイ、ミズなどの山菜、ナラタケやマツタケなどのきのこ、ヤマブドウ、アケビ、クリ、サルナシなどの木の実、ウルシの樹液などの工芸材料、クマ、キジ、ヤマドリ、カモ、キツネ、テンなどの狩猟鳥獣からの肉や毛皮も様々な生き物たちの存在があるからこそ利用できるものです。

ウ. 水産物

ホタテガイ、ヒラメ、クロマグロ、イカ類、ウスメバル、ワカサギ、シラウオ、サメ類、ヤマトシジミ、ウバガイ（ホッキガイ）、トゲクリガニなどのほか、コンブ、ワカメ、フノリ、エゴノリ、イワノリ、マツモなどの海藻類など、海に囲まれ、大型の汽水湖を持つ本県は数え切れないほど多様な水産資源に恵まれ、古くから食生活の中心となってきました。

エ. その他の原料・材料等

キハダやホオノキの樹皮やセンブリ、トウキなどの生薬原料、ネマガリダケ、アケビのつる、ヤマブドウの樹皮などのかごやざるの材料、麻やシナノキなどの繊維、化粧品の原材料となる植物や動物など、縄文の昔から、生活の道具や薬など、生活する上で必要なものは全て、身近な生き物たちの利用により成り立っていました。



コラム

青森に伝わる伝統作物

県内には、地域特有の風土に生まれ、その地域独特の農作物が先祖から代々受け継がれ、各地に残されています。

これらの遺伝資源を守り、上手に活用していくことも、生物多様性の保全にとってとても大切なことです。

- あんず「八助」
- 食用菊「阿房宮」
- にんにく「福地ホワイト六片」
- はとむぎ「中里在来」
- そば「階上早生」
- 柿「妙丹柿」
- ながいも「がんくみじか」
- きゅうり「糠塚きゅうり」
- とうがらし「清水森なんば」
- もやし「大鰐温泉もやし(大豆:小八豆)」
- せり「一町田せり」など



糠塚きゅうり



大鰐温泉もやし



福地ホワイト六片



コラム

青森の水産物「青森おさかな自慢」

青森県は陸奥湾を中心に三方を海に囲まれ、白神山地や八甲田山に代表される豊かな自然と漁場に恵まれ、年間を通じて四季折々に様々な種類の水産物が水揚げされています。

その美味しい「おさかな」にまつわるエピソードやうんちくなどを「青森おさかな自慢」(<https://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/agri/osakanajiman.html>)としてとりまとめ、漁師の思いやこだわりなど盛りだくさんの自慢情報で「青森のおさかな」の魅力を発信しています。



青森の海藻

山に豊かな森があるように、海の中にも「海藻の森」が広がっています。海の中の森は、藻場と呼ばれ、魚介類などの産卵場所や生息の場であり、沿岸漁業にも重要な役割を果たしています。

青森県は三方を海に囲まれ、異なる特性の4つの海（日本海、太平洋、津軽海峡、陸奥湾）を有しているため、200種類以上もの様々な海藻類が生育しています。



青森の山の幸

八甲田山、白神山地、岩木山、下北半島の山々をはじめ、県内には緑豊かな森林が広がり、山菜やきのこなど多種多様な山の幸に恵まれ、春の山菜から秋のきのこまで季節に応じて、様々な山の幸を利用して来ました。



③ 文化的サービス

私たちの暮らしに潤いを与えてくれる、地域の祭りや、余暇の場の提供、生物資源を利用するための知恵や技などは文化的サービスといえます。

ア. 生物資源を利用するための知恵や技

食品加工保存技術（日干し、焼き干し、寒干し、塩蔵）や食材の特性に合わせたバリエーションに富んだ地域食文化、薬としての利用の知恵、木材の特性に合わせた加工技術、繊維加工など植物材料の特性を活かした加工利用技術、マテ漁、氷下漁、投網漁、やな漁、四手網漁、瀬付き漁、しば漬け漁など、それぞれの魚種の生態を利用した伝統的漁法など、長年にわたる生き物たちの利用の積み重ねがもたらしてきた知恵や技があります。

イ. レクリエーション資源の提供

国立公園などの自然公園をはじめとして、スポーツの場としての河川、海岸、山岳の利用や子供の遊び場や自然観察会の場としての水辺、草むら、里山、産業体験の場としての農地、林地、海岸なども文化的なサービスを生物多様性がもたらしているものと考えられます。

ウ. 祭事

県内各地には、生き物たちと関わりのある様々な祭事が今も残っています。津軽のお山参詣や虫送り、荒馬、下北のもちつき踊り、南部のえんぶりなどの伝統行事はその代表的なものといえます。





コラム

南部地方の雑穀文化

南部地方では、昔は冷涼な気候や平地の少なさなどから稲作が発展せず、畑作が中心で、米の代わりに、麦や雑穀を主食としていました。品種改良や水環境の改善に伴い、田んぼが広がった今でも、各地で様々な雑穀が栽培され、食卓に彩を添えています。

- 豆しとぎ
- 南部せんべい
- 串餅 (くるみ、じゅうねん)
- はっと・かけ
- ひつつみ など



串餅

青森の発酵食文化

発酵食品は、食料を長期保存するために作り出された、先人たちの生きるための知恵です。漬物、味噌、醤油、納豆、熟鮭、酒など、幅広く、保存のためだけでなく、乳酸菌や酵母など微生物の働きを利用して、酸味やアルコール、うま味などを醸成し、食べ物を美味しくもしています。

- 漬物
- 飯鮭 (ハタハタの鮭、すしこ等)
- 日本酒 など



漬物

青森の寒干し文化

昔は、どこの家でも軒先に自家製の「寒干し大根」をつるし、冬場の貴重な食料としていました。食料の乏しかった時代、大寒の頃になると、土の中に眠らせておいた秋じまいの大根を取り出し、家族全員が協力しながら、一冬分の「寒干し大根」を作っていました。雪に閉ざされる暮らしと冬ごもりのための食糧確保のため、自然環境を利用した先人たちの知恵です。

- 寒干し大根
- 干し餅
- しみ豆腐
- 干し柿
- 棒タラ
- 新巻鮭 など



寒干し大根



コラム

青森の手仕事

風土豊かな青森県には、地域の自然資源を使った「津軽塗」や、長く厳しい冬の間知恵と工夫をすることで作り出す「こぎん刺し」などをはじめとした青森ならではの魅力的な工芸品が数多くあります。

厳しい気候風土のもと、自然の恵みも災いも受け入れてモノは祈るように作られてきました。暮らしの中で必要なものを自然の素材を手に生み出してきた手仕事には、知恵と技、そして生きる力が込められています。

- 津軽塗
- こぎん刺し
- 南部菱刺し
- 津軽裂織
- 南部裂織
- あげび蔓細工
- 津軽竹籠
- ひば細工
- 温湯こけし
- 下川原焼土人形
- 八幡馬
- 津軽打刃物
- ブナコ
- 津軽金山焼 など



こぎん刺し

4 調整サービス

洪水、土砂、飛砂災害などから生活を守る働きや植生の被覆によるヒートアイランド現象等の抑制など気候の緩和、森林や海岸の藻場など、植物による二酸化炭素の吸収や、干潟や河畔の植生や二枚貝など底生生物による水質浄化作用の働きなどは、調整サービスとされています。

むつ市の芦崎湾や平内町の浅所海岸、岩木川の河口や小川原湖湖沼群などの干潟は、多くの水生生物の生活を支え、産卵や幼稚仔魚に成育の場を提供する以外にも、水中の有機物を分解し、栄養塩類や炭酸ガスを吸収し、酸素を供給するなど水質の浄化に大きな役割を果たしています。

東日本大震災の津波の被害を緩和した太平洋岸の海岸防災林、野辺地町にある日本最古の鉄道防雪林、飛砂や潮風から農地を守る屏風山のクロマツ林など、生物の力を上手に利用して災害を防いでいます。

(4) 地域の特徴

県内を6つの行政区域に分け、生物多様性に関する特徴を述べます。

① 東青地域

青森市、平内町、今別町、蓬田村、外ヶ浜町で構成される地域で、北側は津軽海峡に面し、北西側は陸奥湾、南側は八甲田火山、西側は中山山脈に囲まれています。

夏はヤマセ、冬は多雪で、農業は稲作とりんごが中心です。

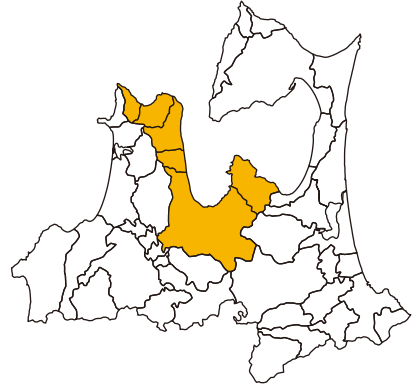
全市町村が陸奥湾に面し、ホタテガイ、ホヤ、ナマコ、トゲクリガニ、津軽海峡では、アブラツノザメ、クロマグロなど、漁業が盛んです。

森林率は76%でそのうち61%が国有林です。国有林には、八甲田山の高山植生やブナ林生態系、津軽半島のヒバ林生態系が広がっています。

平内町小湊の「小湊のハクチョウおよびその渡来地」は国の特別天然記念物に、平内町夏泊半島の「ツバキ自生北限地帯」は国の天然記念物に、また、青森市の「又八沼に生息するシナイモツゴ」や「田代平湿原植物群落」は青森市の天然記念物に指定されています。

また、三内丸山遺跡や小牧野遺跡など、日本を代表する縄文遺跡群が残されています。

この地域には十和田八幡平国立公園をはじめ、津軽国定公園、浅虫夏泊県立自然公園、丸屋形岳自然環境保全地域など、自然環境を保全するための地域指定がなされています。



② 中南地域

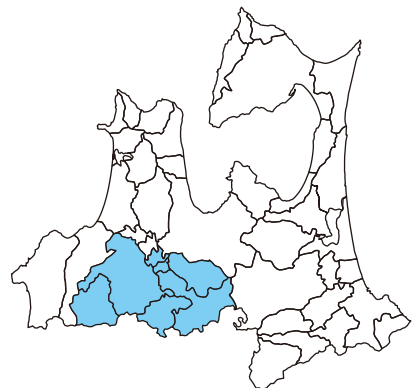
弘前市、黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村で構成され、東側に八甲田火山、西側に白神山地と岩木山、南には大鰐山地、北側は津軽平野が広がり岩木川、浅瀬石川、平川が津軽平野を潤しています。県内で唯一、海に接していない地域で、冬の積雪量が多いものの、ヤマセの影響は少なく比較的温暖な地域です。

農業は稲作とりんごが主体ですが、野菜の生産も盛んで、清水森ナンバ、一町田セリ、大鰐温泉もやしなど、地域の特性を活かした野菜も生産されています。

地域の木材資源等を使った、津軽塗りやブナコなどの工芸品づくりも盛んです。

漁業は、岩木川を中心に、アユ漁やコイ漁などが行われています。

森林率は64%でそのうち73%が国有林です。国有林には、白神山地のブナ



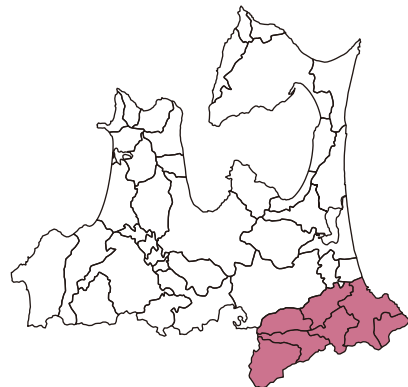
林生態系、岩木山の高山植生、大鰐の天然スギ・ヒバ混交林などが広がっています。

りんご園や社寺林ではフクロウ類やチゴハヤブサなど猛禽類の繁殖がみられます。

我が国を代表するブナ林生態系である世界自然遺産白神山地をはじめ、十和田八幡平国立公園、津軽国定公園、赤石溪流暗門の滝県立自然公園、岩木高原県立自然公園、黒石温泉郷県立自然公園、大鰐碓ヶ関温泉郷県立自然公園、森川海条例保全地域(岩木川流域)など、多くの自然環境が保全地域に指定されています。

③ 三八地域

八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村で構成される地域で、東側に太平洋が広がり、西側に八甲田火山、南西部に三戸丘陵、南側に名久井山地、階上山地に囲まれています。海岸線は砂浜と岩礁域が交互に続き、南側は三陸海岸へと続いています。



春から夏にかけてはヤマセ(偏東風)が吹き低温の日が多い、冬は冷え込みが厳しいものの晴天の日が多く、降雪量は比較的少ない地域です。

農業は稲作、果樹の他、ニンニク、ホップ、葉たばこ、食用菊など多様な作物や雑穀が栽培され、養豚、養鶏を中心とした畜産も盛んです。

漁業は国内有数の八戸港を擁し、イカ、サバを中心に水揚げされ、水産加工業も盛んです。蕪島から南側には岩礁と砂浜が続き、海藻が繁茂し、ウニやアワビを育むとともに海藻を加工したスキコンブやアカハタ餅などの食文化も特徴的です。また、馬淵川や新井田川ではサケのふ化放流も行われています。

森林率は58%ですが、国有林率が21%で、民有林の割合が県内一多い地域です。その民有林には、県内のアカマツ林の約半分が分布し、南部アカマツの産地となっています。

蕪島のウミネコ、冬の磯には天然記念物のコクガン、アカマツ林で繁殖するイスカなど特徴的な鳥の生息が見られます。

また、種差海岸の海岸植生や天然芝生地、砂浜や磯などの自然環境が認められ、2013年に三陸復興国立公園及び日本ジオパークに指定されました。

本地域では、三陸復興国立公園、名久井岳県立自然公園、戸来岳自然環境保全地域、森川海条例保全地域(市川海岸及び八戸港海岸を含む五戸川流域、太平洋沿岸の一部を含む馬淵川流域、太平洋沿岸の一部を含む新井田川流域)などの保全地域指定がなされています。

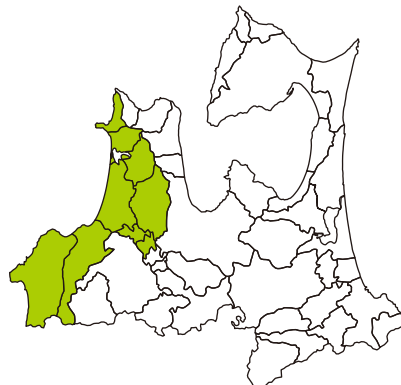
④ 西北地域

五所川原市、つがる市、鱒ヶ沢町、深浦町、板柳町、鶴田町、中泊町で構成され、西側は日本海に面し、鱒ヶ沢町から小泊までは長い砂浜（七里長浜）が続き、鱒ヶ沢から南と小泊から北は岩礁、東側は中山山脈、南側は白神山地、中央部には広大な津軽平野、岩木川が流れ河口には十三湖、西側には屏風山砂丘が広がっています。

夏は内陸型の高温多湿地帯ですが、北部ではヤマセ（偏東風）の影響を受け、冬は多雪地域となっています。

広大な津軽平野では稲作、岩木山の裾野でりんご、屏風山地域ではメロンやスイカやネギが栽培され、日本海では、クロマグロ、ウスマバル、ヒラメ、ハタハタ、エゴノリ等の海藻、十三湖では、ヤマトシジミなどの漁業も盛んです。

森林率は64%、国有林率は73%で、青森ヒバの主産地となっているほか、世界自然遺産白神山地のブナ林生態系、鱒ヶ沢のスギ天然分布北限、屏風山地域の原風景を残すベンセ湿原、岩木川河口に広がるヨシ原など、様々な生き物たちを育む多様な生態系が存在しています。



また、ハクチョウやガンカモ類など大型の渡り鳥の国内有数の中継地にもなっています。

世界自然遺産白神山地、津軽国定公園、赤石溪流暗門の滝県立自然公園、芦野池沼群県立自然公園、然ヶ岳自然環境保全地域、四ツ滝山自然環境保全地域、森川海条例保全地域（日本海沿岸の一部を含む岩木川流域、大和田海岸を含む赤石川流域、塩見崎海岸を含む追良瀬川流域）、サクラマス・サケ保護水面区域（吾妻川）などが保全地域として指定されています。

⑤ 上北地域

十和田市、三沢市、野辺地町、七戸町、六戸町、横浜町、東北町、六ヶ所村、おいらせ町で構成され、東側に太平洋、北西に陸奥湾、南西側に八甲田火山、中央部には広大な台地が広がり、台地の太平洋側に小川原湖などの湖沼が点在し、十和田湖からは奥入瀬川が流れ太平洋に注いでいます。

春から夏にかけてはヤマセ（偏東風）が吹き、低温の日が多く、冬は晴天の日が多く、降雪量は比較的少ない地域です。

農業は酪農、肉用牛、養豚、養鶏などの畜産業と、夏季の低温と日照不足に適応したナガイモ、ニンニク、ゴボウ等の根菜類の栽培が盛んです。

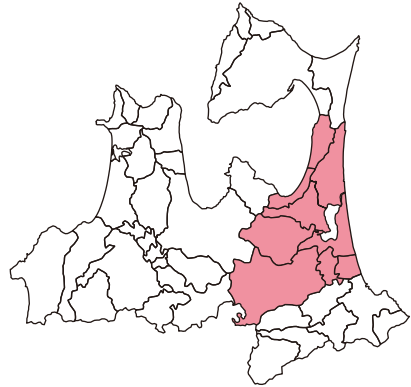
漁業は、陸奥湾のホタテガイ、カレイ類、ナマコ、小川原湖のヤマトシジミ、シラウオ、ワカサギ、太平洋のスルメイカ、サケ、ヒラメ、ホッキガイなどが盛んで、

十和田湖のヒメマスなども特徴的です。

森林率は 55%、国有林率は 56% で、県内で最も森林率が低い地域ですが、十和田湖や奥入瀬渓流など主要な観光エリアが広がっています。

また、仏沼をはじめとした小川原湖周辺の湿地帯生態系（オオセッカ、チュウヒ、ニホンイイズナ、マリモ、イシガイ類、ヤマメ、カジカ類、ヤツメウナギ北方種など）や奥入瀬渓流の溪畔林生態系（シダやコケの森）などの特徴的な生態系が存在するほか、国内移入種である姉沼のイケチョウガイが、移入元の琵琶湖では外来種との交雑が進んだ結果、国内唯一のイケチョウガイ野生集団の生息地となっています。

なお、ラムサール条約湿地「仏沼」、十和田八幡平国立公園、森川海条例保全地域（十和田湖及び横道海岸を含む奥入瀬川流域、小川原湖湖沼群及びむつ小川原港海岸、天ヶ森海岸、砂森海岸を含む高瀬川流域）、ホタテガイ保護水面区域（野辺地町）などは保全地域として指定されています。



⑥ 下北地域

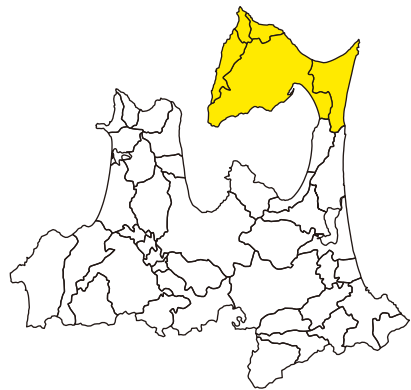
むつ市、大間町、東通村、風間浦村、佐井村で構成され、北には津軽海峡、西は平舘海峡、南は陸奥湾、東は太平洋に囲まれ、ほとんどが下北山地、燧岳火山、恐山火山、吹越山地などの山地帯となっています。また、太平洋側には大規模な砂丘（猿ヶ森砂丘）が広がっています。

陸奥湾に面した西通りは夏暑く冬は多雪で、津軽海峡に面した北通りは冬風が強く、少雪で、津軽海峡と太平洋に面した東通りでは夏はヤマセ（偏東風）の影響で涼しく、冬は沿岸部で雪が少ない地域です。

農業は、冷涼な気候を活かしてダイコンやバレイショが生産されています。漁業が盛んで、ホタテガイ、クロマグロ、ヒラメ、サケ、マダラ、アワビ、コンブなど多種多様な魚介類が水揚げされています。

森林率は 84% と非常に高く、国有林率も 73% と、森林の割合が非常に高い地域で、青森ヒバの産地となっています。

大畑川のスギノコや下北山地源流域のコガタカワシンジュガイ、縫道石山のオオウラヒダイワタケ、芦崎湾のハマグリ、宇曾利山湖の耐酸性ウグイなどの貴重な生き物のほか、世界最北限のサル生息地でもあります。



保全地域としては、下北半島国定公園、猿ヶ森自然環境保全地域、燧岳自然環境保全地域、森川海条例保全地域（木野部自然海岸及びちぎり浜海岸を含む大畑川流域、川内港海岸を含む川内川流域）、サクラマス・サケ保護水面区域（川内川、老部川）、サクラマス（スギノコ）保護水面区域（大畑川赤滝上流）、ホタテガイ保護水面区域（むつ市川内町）、アカガイ保護水面区域（むつ市芦崎湾）が指定されています。

（５）里海、里地、里山の利用

① 里海

三方を海に囲まれた本県は海岸線の延長が約 800km（全国 13 位）もあり、国内有数のアマモ場が広がる陸奥湾は縄文の昔から好漁場として利用されてきました。また、太平洋、日本海、津軽海峡に面した藻場の広がる海岸では様々な海藻、ウニ、アワビ、サザエなどの恵みをいただき、十三湖、小川原湖などの汽水湖ではヤマトシジミやワカサギなどの淡水魚を利用してきました。近代に入り、護岸の整備や磯焼けなどにより、藻場が減少するとともに、ウニや巻貝等の食害などによる藻場の減少も危惧されています。

② 里地

田んぼ、ため池、水路などの農業生産基盤と農作業のサイクルとの中に形作られた生態系が、かつては各地に存在し、両生類、トンボ、ゲンゴロウ、メダカ、ホタルなどが普通に見られていました。しかし、ほ場の整備や農薬の多用などによりその生態系が大きく減少し、普通に見られていた様々な生き物たちが今は絶滅危惧種となっています。

また、南部地域と下北地域では古くから馬の生産飼育をはじめとした畜産が盛んで、各地に草地が広がり、草地生態系が形成されていましたが、モータリゼーションの進展に伴う馬の需要激減や輸入飼料による飼育技術の確立により草地は急速に失われ、今では種差海岸や尻屋崎などにその面影を残しているのみです。

③ 里山

暮らしの場に隣接した里山は、古くから自家消費のための薪炭材、建築用材、採草地、カヤ場として共同で利用していました。その後、官民有区分により大部分が官有地に編入され、入会慣行が制限されました。その後の官林開放により民有地となった森林も時代の変化に伴い共同利用は衰退し、スギ人工林へと変貌し、今は手入れの行き届かない森林が増えています。

また、南部地域や下北地域では、山を拓いて畑にし、数年ののちに森に返すといういわゆる焼き畑利用を行っていました。山を廻しながら、アワ、ソバ、大豆、小豆、小麦、雑木、アカマツなどの恵みを享受するという循環利用をしていました。戦後の木材需要の増大や農作業の効率化などから、共同利用や焼畑利用は衰退し、アカマツ林やスギ林になっています。